

大木先生の紫綬褒賞受章によせて



昭和63年3月に本学を停年退官された大木道則先生が、此の度有機化学の研究・教育の御業績およびこれによる広く学会・官界への御貢献により平成2年度の紫綬褒章を受章されました。この御受章は、私共有機化学の後進のみならず、化学教室をはじめ理学部にとっても、まことに喜ばしく、心からお祝いを申しのべたいと思います。

先生の御略歴と御業績につきましては、御退官当時の本広報に化学教室の中村助教授が詳しく述べられており、まだ間もないのですが、ここに改めて紹介させていただきます。

先生は、昭和25年3月東京帝国大学理学部化学科（漆原研究室）を御卒業になり、同年東京都立大学に赴任されました。程なく、米国イリノイ大学に博士研究員として留学され、N. Leonard 教授のもとで、中員環状化合物の渡環相互作用の研究を推進されました。御帰国後、都立大学助教授をへて昭和31年化学教室に助教授として戻っておいでになりました。昭和37年教授に昇任され、40年3月に新設の物理有機化学講座御担当となりました。

幾つかの分子内相互作用の御研究の後、有機化合物の反応性を系統的に理解するには、分子の持

岩 村 秀（化学教室）

つ配座異性体（炭素・炭素単結合に関する内部回転異性体）のそれぞれに固有な反応性を理解しなければならないという御考えに至り、炭素骨格の分子内部回転が止ったことに由来する異性体の単離の御研究に着手されました。特に、9-置換トリプチセンや9-アリールフルオレン誘導体がこれに適していることを発見され、回転異性体の合成・単離、回転障壁の決定、回転異性体の反応性、異性体平衡比から弱い分子内相互作用の検出へと飛躍的に研究が進み、昭和55年「有機化合物の配座固定と変換に関する研究」によって日本化学会賞を受賞されました。とくにジクロロエタンなどエタン型分子における回転異性体の存在は、本教室水島三一郎、森野米三両教授の御発見になるものであり、これを巧に分子設計し室温で安定に単離できる回転異性体にまで発展させたことは意義深く、教室の伝統の重みを感じるものであります。

先生は研究の御推進に当たり、UV/VIS, IR, NMR とその時その時の先端的な分光手段を駆使され、とくにNMR では、時間項を含むスペクトル解析で理論の検証と応用につとめられ、所謂Dynamic NMR 法の信頼度と応用性を高められました。

一方、先生は化学教育・行政に関しても活躍され、日本化学会化学教育委員長、学術会議、IUPAC、ユネスコなどの委員を勤められました。その間、CBA化学、CHEMS化学の紹介をされ、昭和44年には学術会議会員に最年少で当選されました。さらに、学術会議科学教育小委員長、文部省学習指導要領作成協力者、理科教育・産業教育審議会委員、教育課程審議会専門委員、日本学生科学賞審査委員長、井上科学振興財団選考委員長、東レ理科教育賞審査委員なども歴任されています。

先生は学内でも各種委員会の委員を勤められ、大学紛争当時（昭和43～48年）は評議員としてご苦労されました。

御退官後の御活躍について紹介いたします。先生は、岡山理科大学に御勤務されております。新しい研究室をお作りになり、回転異性体の反応性、基質—溶媒相互作用についての御研究を展開されておいでです。学部1年生の教育について、当初は「学生を一から教育するのは大変だよ」などと洩らしておられました。重点領域研究「分子設計」の大きな一つの班長を務めておられます。一番のお仕事は、1989環太平洋国際化学会議の組織・実行委員長を務められたことです。この会議は、米国、カナダ、日本をはじめとする十数か国の化学

会が連合して取り行う研究発表討論会で、ホノルル市で開催され、参加登録者数7,500名、発表件数4,000を超える巨大会議でありました。これを的確な御判断力、指揮性、英語力で見事に取り仕切られました。会議は学術的に有意義であったばかりでなく、21世紀に向かつての社会に対する化学の役割、環太平洋諸国の役割などの基調講演を組み込んだ格調高いものであったと評価されております。その他にも一昨年と本年開催されたIU-PAC 物理有機化学国際会議ではそれぞれ特別講演と招待講演を行っておられます。

このように東奔西走の御活躍です。お祝を申し述べるとともに、御自愛の上一層の御発展を祈り上げます。